

助成年度：平成 6 年度

[所属] 中京大学 社会学部

[役職] 助教授

[氏名] 代表者 古川 彰 (他計 8 名)

[課題]

河川と湖沼流域の環境保全の変容に関する実証的研究

－記録文書と口頭伝承を通して－

[内容]

本研究は湖沼と河川流域における環境と文化の保全の変遷過程とそこに蓄積されてきた工夫の様態を環境史の立場から調査研究することを目的とする。

環境と文化の変容過程を何に焦点をあてて明らかにするのかがこのような調査研究ではその成否をわけるのであるが、本研究では生活のなかでく繰り返し行われる事と突然の出来事という点に注目し、研究をすすめている。こうした時間軸での変容とともに、空間軸での変異も重要な視点であると考えている。保全という営為はその土地、場所の固有の形態と論理で展開されるものであると考えるからである。そこで本研究ではこれまで私たちのプロジェクトが蓄積してきた琵琶湖畔の村で 250 年間以上も書き続けられてきた「村の日記」などの文書データの分析をすすめる時間軸での変容過程の分析をすすめるとともに、琵琶湖とは対照的な河川の流域（矢作川）をあらたな対象地として選び調査を実施した。湖沼地域として琵琶湖北西部の集落（マキノ町知内地区）、河川流域として愛知県東部矢作川流域（主に上流部の旭町と中流部の豊田市）を調査対象地域とした。

両地域ともに長い水との関係を取り結んできたのであるが、そこに残された文書にあらわれるのは治水と利水の繰り返しであった。当然の事ながら記録に記され、その水辺の環境保全の歴史を刻印するのは災害による水辺の変容とその復旧のための努力である。くり返される災害による川辺の改変、水を利用するための水辺の改変が繰り返し記録されている。しかし、そうした出来事と出来事との長い日常は文書に残されることは少ないが、住民の水とのつきあいの営為がある。両地域とも使われた水は各家につくられた伝統的な浄化槽で濾されたのちに川に流され、浄化槽にのこされたものは田畑で肥料として使われてきた。そこには水とのつきあいの方法の驚くべき共通性が認められると共に、地方でその状況に応じて工夫された仕掛けの個性がある。それらの工夫をく伝統的システムと呼ぶとすれば、それらは昭和 30 年代後半から一様に崩壊する。その契機は治水の思想の優越と言えるだろう。治水のための水辺の変容はく伝統的システム>の個性を許さないばかりではなく、住民生活の川や湖沼との直接的な関係を切断する。住民は水道と下水道を媒介にした水との間接的な関係に置かれざるを得ない。住民と河川・湖沼との結びつきはく見えないシステム>となり、昭和 30 年代後半から河川・湖沼の排水路化＝汚染は急速にすすんでいく。

その後両地域で展開する環境保全運動は、く見えないシステム>を見えるものへの取り返しとして展開される。そのとき運動の起点となるのは琵琶湖でも矢作川でも汚染されても河川・湖沼で生きなければならなかった漁業者・農業者であった。彼らの運動は生活基盤の回復としてあらわれ、その成果は都市住民の水辺の回復運動へと受け継がれ、さらには上流部の山の保全運動へと展開していく。これらの運動ではく伝統的システム>の再生というテーマがくり返される。懐古的に語られるだけではなく、それらが現在に生かされるための方法があらたな環境保全の可能性を広げていると言えるだろう。

そのような意味で昭和 30 年代でさえすでに歴史的な一時期になろうとしている今、昭和の記憶を記録していく努力は文書の発掘と共にすすめるなければならない作業である。さらにこれまでほとんど為されてこなかったそれらを利用可能なものとするためのデータベース化の作業もますます必要なものとなると考えている。